

家庭科における持続可能な社会の 概念的理解の展開への試案

竹下 浩子・鈴木 明子
(2022年10月7日受理)

The Development of a Conceptual Understanding of a Sustainable Society
in Home Economics Education

Hiroko Takeshita and Akiko Suzuki

Abstract: To promote a concept-based curriculum in home economics aimed at fostering versatile skills, we clarified the subject-specific perspectives that home economics addresses and the qualities and abilities required in home economics. The research method involved obtaining suggestions on how home economics can be involved in realizing well-being in a sustainable society. Next, we organized the qualities and abilities required in home economics based on a conceptual understanding. Finally, we identified paths for a home economics curriculum to formulate a conceptual understanding.

We identified the following four directions to introduce a concept-based curriculum in home economics: (1) Design a curriculum with the pursuit of well-being as the subject axis. (2) Develop a curriculum that takes the family and home as its starting point and expands the idea of transferability to a sustainable society. (3) Consider the learning content and difficulty level of questions according to each student's developmental stage. (4) Inquiry-based learning that draws out students' interests and concerns should be actively incorporated. The promotion of a conceptual curriculum allows for the development of curriculum management with competency-based, cross-curricular learning.

Key words: Sustainable Society, Well-being, Conceptual Understanding, Curriculum of Home Economics

キーワード：持続可能な社会, ウェルビーイング, 概念的理解, 家庭科カリキュラム

1. はじめに

現行の学習指導要領（2017告示）¹⁾では、各教科等の本質的な意義が見方・考え方とともに整理され、各教科等の独自の資質・能力だけではなく、情報スキルや批判的スキルなどの汎用的スキルを、全教科等を通してどのように支援し全人格を形成していくかが問われている。この背景には、経済発展を前提とした社会構造の中で、将来の雇用人材に求められるスキルに焦点が当てられ、学校教育ではそれらのスキルをどの

ように獲得させることができるかという側面が重視されてきたことに対する反省がある²⁾。予測困難な社会の中で、急速な生活の変化を余儀なくされている我々は、望ましい未来を展望して、教育施策の在り方を批判的にみつめ、能動的にその関わり方を模索する必要がある。このような状況の中で、家庭科は、その教科としての独自性をどのように発揮して汎用的資質・能力を支えていけばよいのだろうか。

家庭科の学びにおける、既存の知識・経験と新しい知識を結びつけ、生活の営みに係る生活概念を形成す

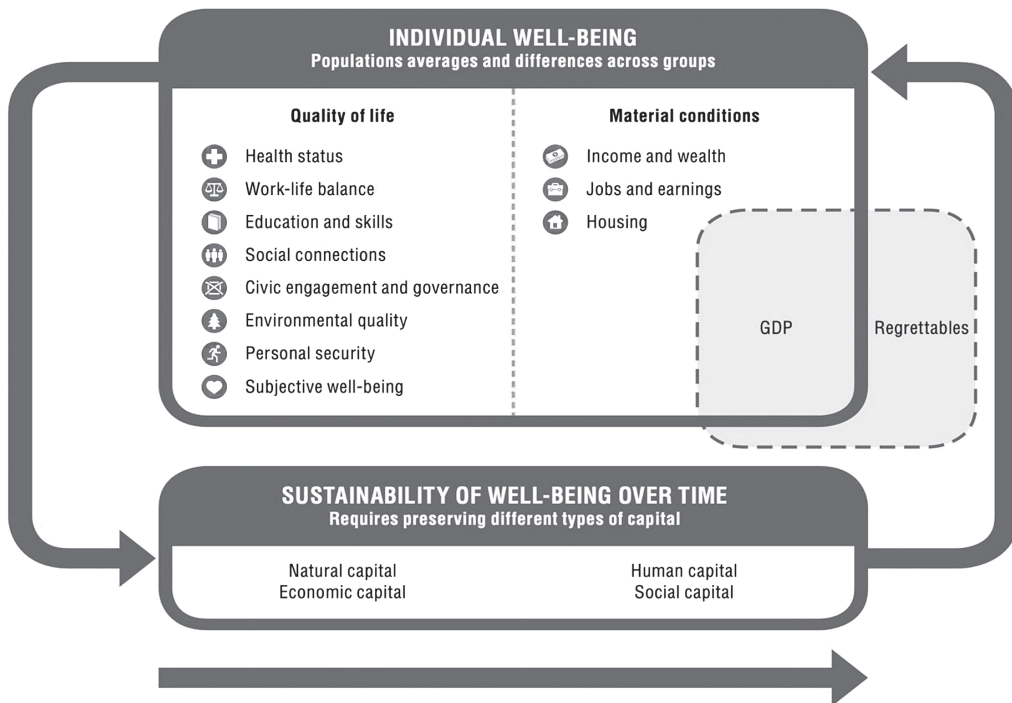
ることの重要性は、これまでも関係者の中で共有されてきた。しかし、児童・生徒がリアルな生活実践の場において、主体的に生活に関わろうとする態度や、実生活に必要な汎用的スキルの獲得に至っていないことが、家庭科のカリキュラム研究で課題とされている(鈴木2019)³⁾。奈須(2019)⁴⁾は、この生活概念の形成を「知の総合化」と捉えた上で、家庭科は、この「知の総合化」を自然に成し遂げる構造を潜在させているにもかかわらず、この構造が返って教科観を曖昧にし、要素的技能の習得や生活の定型的科学化に指導の重点が置かれていることを指摘している。そのため、汎用的資質・能力の形成に向けて、家庭科と他教科がどのように連携していけばよいのか、教科によって見方・考え方の独自性が存在するのはなぜかといった、教科を俯瞰した視点に立った深い洞察力と、教育課程の統合的な理解が学習者同様、授業者である教師自身に求められている。

家庭科は、人々の心身共に幸せな状態であるウェルビーイングの追求が中心課題である家政学を背景学問とする教科と捉えることが一般的である。ゆえに、以前から、よりよい生活の実現という教科の目標において、ウェルビーイングを視野に入れた教科の内容と指

導が行われてきた⁵⁾。しかし、個人レベルから社会レベルへのウェルビーイングの循環の捉え方は曖昧なままにされてきた。そのため、もう一度、個人レベルと社会レベルのウェルビーイングについて再確認する必要がある。さらに単に人間のウェルビーイングとして捉えるのではなく、エコシステム全体の要素の一つとして人間を捉えた場合、持続可能な社会の視点からどのような生活システムの捉え方の変革が求められるかについて考えていく必要もある。

そこで、家政学の体系からウェルビーイングに基づく持続可能な社会の概念について整理し、家庭科が扱う教科独自の視点と家庭科に求められる資質・能力を明確にしたうえで、汎用的スキルの育成を目指した概念的理解に基づく、家庭科のあり方を試案する。

本研究では、まず、家庭科を支える家政学の学問領域から人間環境と自然環境、地球環境のエコシステムの相互関係を明らかにし、家庭科が持続可能な社会におけるウェルビーイングの実現にどのように関わることができるか示唆を得る。次に、概念型理解の側面から、家庭科に求められる資質・能力を整理し、それを形成するための家庭科カリキュラムの提案の意義と方向性を見出すことを目的とする。



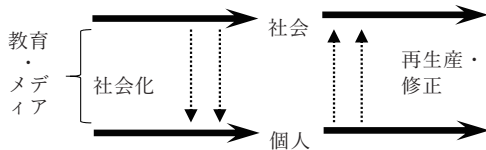
Source: OECD (2011), *How's Life?: Measuring Well-being*, OECD Publishing, Paris, <http://dx.doi.org/10.1787/9789264121164-en>.

図1 ウェルビーイングのフレームワーク

2. 個人と社会のウェルビーイングの捉え方

OECD（経済協力開発機構）が2011年から始動させている「OECD ベターライフ・イニシアティブ」⁶⁾の取り組みにおいては、ウェルビーイングの定義と測定に使用するフレームワークを紹介している。このフレームワークは、個人レベルのウェルビーイングとして、生活の質（健康状態、ワークライフバランス、教育、社会とのつながり、市民参画、環境の質、安全、主観的なウェルビーイング）と、物質的豊かさ（収入と財産、雇用と賃金、住宅）の両方を網羅する11の次元を考慮している。一方で、社会レベルとして未来におけるウェルビーイングの持続可能性を自然資本、経済資本、人的資本、社会資本の4つの側面から考慮している（図1）。

持続可能性の議論においては、個人のウェルビーイングだけでなく、社会全体のウェルビーイングをいかに実現させるか、また、そのために個人に何ができるかが中心課題となっている。しかし、これは個人としての人間エージェントのみが社会を創り出しているということの意味しているわけではない。Bhaskar(1998)は、個人と社会は常に関わり合っているが、個人と社会は二つの質の異なる実在と捉えている。彼によると個人の実在に関係なく社会は実在し、個人の行動は、社会を「再生産」あるいは「修正」するに過ぎない。また、個人は社会によって「社会化」される⁷⁾。そこで、実在し続ける個人と社会の間を媒介する要素として、教育やメディアなどにより形成される倫理的価値の存在が考えられる。社会のウェルビーイングは、教育などの媒介により社会化された個人が、倫理的価値に従って働き出すことで再生産・修正される（図2）。



出典：丸山（2006）⁷⁾に筆者が加筆

図2 社会活動の変形モデル

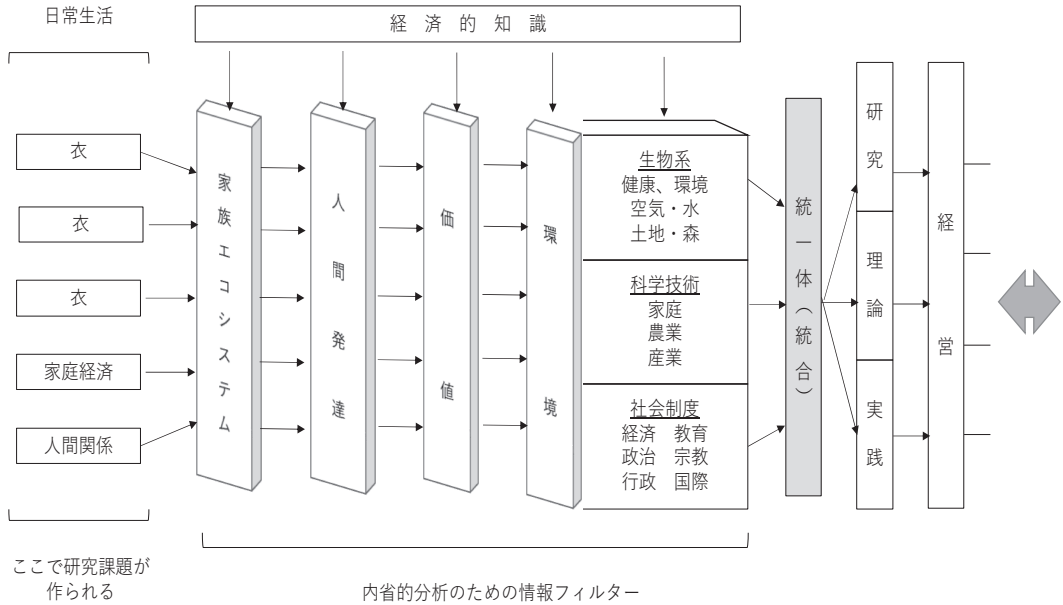
21世紀に入り、人間の生活の営みが、気候変動、貧困や飢餓、生物多様性の問題など地球規模の問題に大きな負荷をかけていることが明白となり、世界全体で取り組む課題であることは周知である。また、これまでの経験主義的、実証主義的科学的アプローチのみ

では、問題の本質を断片的にしか捉えられず、単純な思考の蓄積に過ぎないことも一般的に認識されるようになってきている。そこで、参加型観察やエスノメソドロジーの手法を用いて、観察を通して得られた知識と、自分の既にもっている経験や知識との間にどのような関係があり、個人の倫理性と行動にどのような影響を与えうるか、使命や理念に関わる人間と環境との相互関係性への認識に意味を見出す必要がある。

3. 家政学と持続可能性の概念

家庭科の背景にある家政学（Home Economics）は、Richards(1842-1911)のヒューマンエコロジー思想により発展してきた。家政学は、人もエコシステムの一部と捉え、生活の営みを人間環境だけでなく、自然環境、地球環境に及ぶ全体的視野に立ち、総合化する学問である。ヒューマンエコロジーは、社会学、文化人類学、公衆衛生学、地理学など多岐にわたる分野のアプローチによる学際的学問領域であるが、家政学におけるヒューマンエコロジーの特徴は、家族のエコシステムを最小単位に据え、個人と社会を繋ぐエコシステムは、単体としての個人から家族・家庭、地域社会と広がる中で関係性が構築されるということにある。家族や家庭は、エコシステムの最小単位であるが、そのシステムは他の大きなシステムと相互依存の関係にあり、個別の生活の質の向上（ウェルビーイング）は、その関係性の中で実践されている。これは、個人がそれぞれに多様なウェルビーイングをもちながらも、世界全体を一つの生命体として、概念化された社会の中で倫理的に行動する価値基準をもつことによって再生産と修正をおこなっていることを論拠としている。従って、家政学におけるヒューマンエコロジーのアプローチは、「全体性」、「関連性」、「統合性」を基本概念としている。

Bardir (1990)⁹⁾は、家政学の研究と実践のための関係モデル（図3）を用いて、日常生活における問題を理解するために、家庭環境、家族の発達段階、家族の価値観や信念、こだわりの深さなど家族に影響を与える環境要因をフィルターとして家族のエコシステムを説明している。そこでは、自然環境、科学技術、社会システムの三つから構成される環境との関係性を示し、特定の社会的・文化的規範や価値観が、個人や家族の心理的、生物学的ニーズと相互関係にあると述べている。これは、知識と実践の統合は、倫理や価値観が関わることで初めて成し遂げられることを意味している。この家政学的問いの立て方におけるアプローチの仕方や方法は家政学研究上だけでなく、家庭科の



※ Bardir の図を基に住田らが翻訳、一部追加している。住田らの図では、内省的分析のための情報フィルターの後に「統一体（統合）」が追加されている。持続可能な社会へ向かうウェルビーイングの視点から考えると、多様な個人のウェルビーイングと対照的に社会のウェルビーイングは一つの方向性をもって行われるべきであり、「統一体（統合）」が追加されたことによって、家政学的問いが立てやすくなる。「価値」は個人の価値、「統一体（統合）」は社会の倫理的価値と置き換えられる。

出典：住田（2003）⁸⁾

図3 家政学の研究と実践のための関係モデル

教科観にも有効である。

4. スキルから概念型理解への接続

OECD は、児童・生徒の高いスキルは彼らのウェルビーイングに繋がるとして、2015年に実施された OECD の「生徒の学習到達度調査」(PISA: Programme for International Student Assessment)¹⁰⁾ で、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野の測定評価に加え、新たに生徒のウェルビーイングの視点で国際比較分析を行った。OECD(2015)の「Skills for Social Progress」¹¹⁾によると、生徒のウェルビーイングには、生活の質が関係し、生活の質は生活全体の様々な見方や考え方の調和によってもたらされるとされ、「心理的」、「社会的」、「認知的」、「身体的」という四つの特徴が相互に密接に関連し、相互作用の結果としてウェルビーイングの状態を捉えられるとしている。

さらに生徒のウェルビーイングに関係するスキル

は、認知的スキルと社会情緒的スキルとの二つに整理されている。まず、認知的スキルは「知識や思考、経験を獲得する知的能力」、「獲得した知識に基づく、解釈、熟考、推察」として定義される。この認知的スキルには、パターン認識、処理速度、記憶力などの基本的な認知能力（知っている）や、探究、取り出し、解釈などによる知識の獲得（分かる）、熟考や推論し、概念化する知識の推察（使える）という知識獲得の段階が示されている。

一方、社会情緒的スキルは、「(a) 思考、感情、行動の一貫したパターンで現れ、(b) 学校及び学校外の学習経験によって発達可能であり、(c) 生涯にわたって、重要な社会経済的アウトカムに影響を及ぼす」ものとして定義されている。この社会情緒的スキルには、目標達成に必要な忍耐力・自己制御・熱意や、他者との協働に際し必要となる社会性・他者を尊重し思いやる気持ち、自分の感情への対処として、自尊心・楽観性・信頼感という側面が含まれている。認知的スキルと社会情動的スキルの両者は相互に密接に関係し、ど

これらのスキルも教育によって発達、成長する可能性をもっているとされる。(図4)

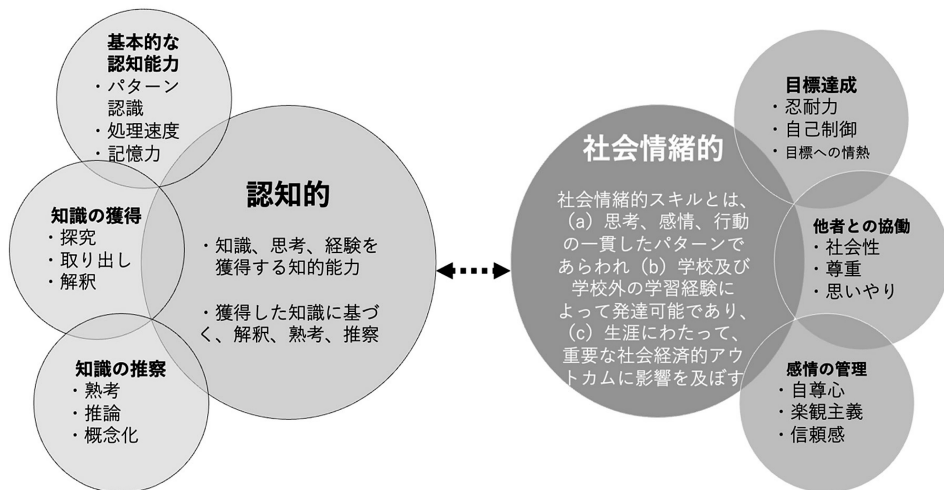
また、これらのスキルは、①生産性 (productivity) = 個人のウェルビーイングや社会経済的進展に貢献するもの、②測定可能性 (measurability) = 測定可能なもの、③成長可能性 (malleability) = 環境や教育によって変化するものという三つの特徴をもっている(国立教育政策研究所 2017)¹²⁾。これは、個々人のウェルビーイングの多様な考え方や価値観に基づいて展開される教育実践において、どのようなレベルのスキルを教育が提供できるかによって制御可能であることを意味している。

しかし、認知的スキルと社会情動的スキルがバランス良く円滑に身に付いたとしても、状況や環境が変わることによって、これらのスキルが上手く発揮されない場合がある。そこで、教科独自の視点と教科に求められる資質・能力の形成過程を注意深く見ていく必要がある。児童・生徒が学ぶ教科独自の個別のコンテンツは、元来、専門的、学問的な知識に裏付けられ、体系化された深い知識である。単なる知識とは違うこれらの知識の獲得は、家庭教育だけで学ぶことは困難であり、学校教育を通じて身に付ける必要がある。

近年、教科の専門的な知識は、暗記中心で詰め込み型の学習とみなされ、否定的に捉えられる傾向にあるが、世界中で行われているキーコンセプト (key concept) やビックアイデア (big idea) など「重要概念」の理解を中心としたカリキュラム (以下、概

念型カリキュラムとする)の開発*が教科等を中心に行われていることにより、教科と教科を繋ぐ「重要概念」から、教科をより深く理解することの必要性が見直されている。つまり、教科の題材や単元の内容や教科独自の視点から生じるとされる「関連概念 (related concept)」は、特定の教科領域や分野に根ざしているため、「重要概念」により深く取り組むのに有効で、より複雑で高度な概念理解を発達させることができると期待されている。

概念型カリキュラムは、各教科等の学習内容を統合し、カリキュラムに一貫性をもたせると同時に、生徒が教科独自の観点から独自の内容の理解を深め、教科の枠組みを超えて、より複雑でより深い考えに取り組む力を育み、知識とスキルを新たな文脈に転移 (transfer) させることを可能にする。転移とは、学んだ知識や技能を別の場面や新しい文脈において使えるようにする能力を示す。一口に学んだ知識が転移可能と言っても、現実の社会において、過去に学んだことを別の文脈において適応できることを認識することは難しい。そのため、教師の役割として、児童・生徒が、類似の構造をもつ文脈から、関連する知識や技能をみつけ出せるよう支援することが求められる。概念型カリキュラムは、「転移の発生を成り行き任せにせず、意図的に遠い転移を促進するように設計されている。」(Erickson, 2017)¹³⁾。



出典：OECD (2015)¹¹⁾

図4 認知的スキルと社会情動的スキルの枠組み

5. 家庭科の概念型カリキュラムのデザイン試案に向けて

概念型カリキュラムの展開は、教科独自の「関連概念」から、教科と教科を繋ぐ「重要概念」を形成し、教科横断的で汎用的なスキルの獲得を目指すため、教科特有の見方・考え方がそのベースとなっている。つまり、教科特有の見方・考え方が存在しなければ、教科を貫く「重要概念」は何かということを考えたり、教科から生じる「関連概念」がなければ、「重要概念」により深く取り組んだりすることもできなくなる。従って、他の教科等を意識しながら、家庭科独自の教科観の上に立つ家庭科の概念型カリキュラムを設計することが重要である。そこで、家庭科の概念型カリキュラムをデザインするために、家庭科の特異性から以下の4点について検討した。

(1) ウェルビーイングの追求による家庭科への回帰

ウェルビーイングは、物質的豊かさの経済指標(GDP: Gross Domestic Product)から、本質的豊かさを図る指標(GDW: Gross Domestic Well-being)として注目され、現在、客観的に可視化できる指標開発が進んでいる^{**}。社会を発展させる本質的な学習活動として、今日の教育全体の目標に据えられているウェルビーイングの追求¹⁴⁾は、家庭科の使命とも重なる。しかし、家庭科は、生活に係る幅広い知識や技能の獲得に加え、複雑な生活事象の関係性や変化する生活システム全般を理解し、生活を創造する過程において学習のオーバフローを起こしかねない。家庭科が対象とするライフスタイルの様相は、時代と共に常に変化するが、よりよい生活はどのようなものであるかというウェルビーイングの追求自体は、大きくは変わらない。従って、家庭科の見方・考え方を踏まえて明示された教科目標、「家庭分野が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫すること」に立ち帰り、児童・生徒が学び続ける忍耐力や目標達成に向けての情熱も手がかりとしながら、ウェルビーイングの追求の視点から構造的かつ体系的に概念型カリキュラムを構築していく必要がある。

(2) 家族・家庭生活からの派生

学んだ知識や技能を別の場面や新しい文脈において使えるようにする転移を教師がどのように設定するかは、概念型カリキュラムにおいてとても重要なことである。家庭科の学習においては、家政学と同様に家族

や家庭をエコシステムの最小単位と捉え、人間の発達や価値といったフィルターを通して見える文脈内での「近い転移」から、自然環境、科学技術、社会システム環境に存在する、より複雑で深い文脈内での「遠い転移」が可能である。従って、身近な家族・家庭の中で育まれる倫理や価値観を概念として一般化することを契機として、地域、社会、国家、地球といった遠いレベルへの転移可能な概念への広がりを感じられるカリキュラムの構築を目指したい。

一方で、社会の中で倫理や価値観は、常に変化している。例えば、一昔前には議論されることのなかった女性の権利や障害者の権利、多様な性のあり方など、新しい倫理や価値観が時代と共に生まれている。倫理や価値観の射程は、時間の推移と共に広がっていくことを念頭に、自分の一生をはるかに超えた時間空間での世代間あるいは民族間のつながりをも考慮したカリキュラムを教師は用意する必要がある。

(3) 発達段階を踏まえたアプローチ

家庭科は、従来から発達段階を意識した生活実践力の育成に力を入れてきた。各校種の学習指導要領の内容からも分かるように、小学校5年生から高等学校の時期にどの学習内容をどのように関連付けて学習させることが効果的か、小学校・中学校・高等学校の学習内容の擦り合わせが行われ、カリキュラムが構想化されている。そのため、学習者である児童・生徒自身が、小学校・中学校・高等学校における家庭科のカリキュラム構造を理解することによって、家庭科における「関連概念」の概念的理解へのアプローチが円滑に行われる可能性もあろう。一方で、主体的な生活実践力や積極的なライフスタイルへの関心に必要な意欲や感情、自己肯定感、コミュニケーション力などの非認知的能力には、幼い頃からの環境が影響を及ぼすことが明らかにされている。概念形成は他者との対話により相対的に構築されることが前提であるため、概念型カリキュラムの構想では、小学校低学年の発達段階の早い時期に、他者との関わり合いを通して、子どもから自発的に湧き出てくる感覚的な概念の発現を大事にしている。仮に低学年の早い時期から概念型カリキュラムに沿った学習が行われていたとしたら、家庭科に初めて触れる小学校5年生では、ある程度高度な概念型学習が用意されるべきである。学習レベルが、易しすぎず難しすぎずに、少しだけ背伸びして届く程度のレベルの教材を準備することが、教師に求められる。

(4) 日常生活から生まれる探究学習

家庭科で扱う知識は、日常生活の中に埋もれた知識(暗黙知)として存在することが多い。これは狭義の生活知と科学知の境界を曖昧なものとし、学校教育

においては学習の対象外として見過ごされる恐れがある。例えば、「靴を脱いで家に上がる」という暗黙知について考えてみる。まず、なぜ靴を脱ぐのかという疑問が生まれる。地理的条件からみると、日本は雨量が多く、雨で濡れた下足のままで部屋の中を歩くと床が水浸しになる。また、衛生的にみると、多湿な気候のため下足のままで足が蒸れるし、畳の目に塵や埃が溜まると掃除がしにくい。さらに、なぜ「上がる」というのかという疑問もある。これについては、高温多湿のため高床式の住宅の機能や、「家(の中)に入る」海外との家に対する概念の違いや生活文化の違いにまで視点が及ぶ。そこで、埋もれた知識があることについて認識するための方法を探索し、探索方法を活用しながら、埋もれている知識を掘り起こすことも家庭科の学習では必要である。他教科の学習においては、科学知を体系化、構造化していくばかりで、そこでは注目されることがない理性や直感、知覚、感覚などを、家庭科特有の認識方法として活用できると考える。知識を得るための方法は、多様で時間の経緯とともに変化するものである。事実を一つひとつ捉えて積み重ね、価値やスキルを身に付けていく構成的で形成的な探究的学びは、事実としての知識を蓄積し、応用、分析、評価を繰り返すことから、物事の本質をつかみ取れるような探究学習となる。このような探究的学習を家庭科において積極的に取り入れていくことは有意義である。

6. まとめ

家庭科における概念型カリキュラムの導入に向けて4つの方向から検討を行った。

概念型カリキュラムは、各教科における見方・考え方をベースとして、教科独自の「関連概念」を導き出し、教科と教科を繋ぐ「重要概念」を形成する。このことから、「関連概念」を教科独自の見方・考え方として捉え、まずは、教科の目標に立ち帰る必要がある。家庭科では、持続可能な社会の構築の観点から世界全体が取り組むべき課題としているウェルビーイングの追求を教科の使命としてきた。そのため、教科の特質として、ウェルビーイングの追求の視点で学習課題を捉え、概念を思考していくことが重要である。その際、転移を促すカリキュラムの設定には、身近で単純な「近い転移」から、より複雑で深い文脈への「遠い転移」へと展開するよう、エコシステムの最小単位である身近な家族・家庭を起点として、社会への転移可能な概念の広がりを設計する必要がある。また、概念型カリキュラムは、教師が意図的に「遠い転移」への発生を

促すようにするため、発達段階に応じた学習内容や発問の難易度を設計することが望ましい。家庭科は学習内容を反復して学びを深化させる螺旋型カリキュラムの特徴を備えていることから、「近い転移」から「遠い転移」への発展を、小学校・中学校・高等学校の一貫性のあるカリキュラムの中で展開することが可能である。さらに、家庭科の学習において科学知を体系化、構造化していく中で、生活に埋もれた暗黙知があることを意識化させる探究学習をカリキュラムの中核に据え、児童・生徒が粘り強く物事の本質をつかみ取れるような学習活動を設定する必要がある。

教科独自の「関連概念」から、教科と教科を繋ぐ「重要概念」を形成するように設計された概念型カリキュラムは、真の意味での教科横断的な学習を前提としたカリキュラム・マネジメントの編成を可能とする。真の意味での教科横断的な学習とは、安易に学習内容相互を結びつけたコンテンツベースの教科連携ではなく、どのような資質・能力を身に付けられるかを明確にしたコンピテンシーベースの教科連携を意味している。このようなカリキュラム・マネジメントの編成を可能にするためにも、持続可能な未来を志向する資質・能力とは何かを教師と児童・生徒が共有することが求められる。他教科と概念で繋がる教科特有の見方・考え方を教師が深く理解した上で、広がりや深まりのあるカリキュラムの構築を目指す必要がある。

【註釈】

* 例えば、インターナショナル・バカロレア (IB) の中等教育プログラム (Middle Years Programme: MYP) では、カリキュラムの中で「美しさ」「変化」「コミュニケーション」「コミュニティ」「つながり」「創造性」「文化」「発展」「形式」「グローバルな相互作用」「アイデンティティ」「論理」「ものの見方」「関係性」「システム」「時間、場所、空間」を探究すべき16の「重要概念」と定め、教科の理解を超えた理解として表している。

** 2019年から内閣府が「満足度・生活の質を表す指標群 (ダッシュボード)」を公表したり、2021年に日本版 Well-being Initiative という団体が創設されたりと、実感としての豊さを測定する指標開発が進んでいる。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省、「中学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説 技術・家庭編」, 開隆堂, 2018年

- 2) 白井俊, 「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来 エージェンシー, 資質・能力とカリキュラム」, ミネルヴァ書房, 2020年, p.63
- 3) 鈴木明子編, 「コンピテンシー・ベースの家庭科カリキュラム」, 東洋館出版社, 2019年
- 4) 奈須正裕, 「コンピテンシー・ベースの家庭科カリキュラム」, 寄稿 コンピテンシー・ベースの授業づくり, 東洋館出版社, 2019, pp.4-7
- 5) 家庭科教育学会編, 「生活をつくる家庭科 第2巻 安全・安心な暮らしとウェルビーイング」, ドメス出版, 2007年
- 6) OECD(2011), How's Life? Measuring well-being, OECD Publishing, Paris, https://read.oecd-ilibrary.org/economics/how-s-life_9789264121164-en (2022年9月29日閲覧)
- 7) 丸山正次, 「政治理論のパラダイム転換 環境政治理論」, 風行社, 2006年, p.105
- 8) 住田和子編, 「生活と教育をつなぐ人間学」, 開隆堂, 2003年, p.27
- 9) Doris R. Badir, Research: Exploring the Parameters of Home Economics, Vol.41 No.10, J. Home Econ. Jpn. 1990年, pp.989-996
- 10) OECD(2016), PISA 2015 Results (Volume I), Excellence and Equity in Education, OECD Publishing, Paris, https://read.oecd-ilibrary.org/education/pisa-2015-results-volume-i_9789264266490-en (2022年9月29日閲覧)
- 11) OECD(2015), Skills for Social Progress: the Power of Social and Emotional Skills, OECD Skills Studies, OECD Publishing, Paris, p.34, https://read.oecd-ilibrary.org/education/skills-for-social-progress_9789264226159-en (2022年9月29日閲覧)
- 12) 国立教育政策研究所, 「OECD 生徒の学習到達度調査 Programme for International Student Assessment, PISA2015年調査国際結果報告書生徒の well-being (生徒の「健やかさ・幸福度」)」, 2017, https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/pisa2015_20170419_report.pdf (2022年9月29日閲覧)
- 13) H. Lynn Erickson, A Lanning, Rachel French 著, 遠藤みゆき, ベアード真理子訳「思考する教室をつくる 不確実な時代を生き抜く力 概念型カリキュラムの理論と実践」, 北大路書房, 2021年, p.2
- 14) OECD(2019), OECD Future of Education and Skills 2030 2030 OECD Learning Compass 2030 A Series of Concept Notes, OECD Publishing, Paris, https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_Learning_Compass_2030_Concept_Note_Series.pdf (2022年9月29日閲覧)

【付記】

本研究は、文部科学省科学研究費助成事業（基盤研究(C) 課題番号22K02524, 代表者 竹下浩子）の研究助成を受けて行った。